

四旬節第4主日 (ヨハネ 9:1-41)

あなたは、もうその人を見ている



(お詫び：メールマガジンでは訂正せず、全体をヨハネ8章として取り上げています。実際はヨハネ9章でした。お詫びし、訂正します)

今週は、先に結論から伝えておきます。ヨハネ9章32節「あなたは、もうその人を見ている。」これが、現代でも起こっていれば、確信を持って「主よ、信じます」(9・38)と言うし、力強くイエス・キリストを告げ知らせることができるでしょう、ということです。

今年司祭銀祝を迎える後輩に、岩本繁幸神父様がいます。私は彼の出身小教区に6年お世話になりましたが、彼の自宅は巡回教会福見教会の塀の隣でした。それが何を意味するか、分かるでしょうか？何かあるたびに司祭に呼び出され、手伝わされるということです。将来シスターを目指すお子さんの家が塀の隣だったとしても、「侍者の手伝いが必要だから来なさい」とは言われません。しかし男の子は、仮に神学校に行く気がこれっぽっちもなくとも、さあ葬式だ、さあ結婚式だ、そのたびに「侍者に来なさい」と言われていたはずです。

かく言う私も、教会から走って5分の家にいました。もっと近い家が二軒あったのですが、なぜか私がたびごとに呼び出され、侍者をさせられていました。想像ですが、私は運動が嫌いでも家だったので、捕まりやすかったのでしょうか。「なんでいつも自分が」という気持ちがありました。結婚式、葬式の関係者からお年玉でももらったことがない千円札を一枚もらうことができましたので、呼び出されるのはたいてい私でした。

客観的には、呼び出していたのは主任司祭です。あるいは香部屋担当のシスターです。しかし、もっと遠くを見ようとすると、主任司祭や香部屋のシスターを使って、イエス様が私を呼び出していたのだと思います。「シロアム--『遣わされた者』という意味--の池に行って洗いなさい」この言葉を言い換えて、「教会に遣わされて、言われたとおりにしなさい」イエス様はいつもそう言っておられたのだと思います。

遣わされた者は、どんな体験をするのでしょうか。二つの体験をするのではないのでしょうか。一つは「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」(9・34)これです。岩本神父様はどうか知りませんが、私は「輝あんちの息子のなんの神父様にならうとっちかよ」(注：「輝明兄貴の息子がどうして神父様になれようか？あの輝明さんの息子が」の意味)と全否定されました。それは、顔から火が出るほど恥ずかしい思いでしたし、「見ていろよ」という発奮材料にもなりました。

もう一つは、結果司祭になってから、何度もイエス・キリストを見ることになったということです。「家族を全員呼んでください」と医者から宣告を受けたおばあちゃんに病者の塗油を授け、三ヶ月後には押し

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

車で戻ってきました。その日が来るとはとても思えなかった。けれども、その日がやってきて、「私たちは今、イエス・キリストが働いたことを見ているのだ」と実感しました。枚挙に暇がないほど、いろんな場面でそこにイエス・キリストがおられることを体験したのです。銀祝までに岩本神父様も全く同じ経験をしたことでしょう。

「シロアム--『遣わされた者』という意味--の池に行って洗いなさい」。イエスが人を遣わし、言われた通りに実行すると、願いが叶った。少なくとも、遣わされたその人はイエスを見ることになった。これは、今も変わらず、起きているのではないのでしょうか。「シロアム--『遣わされた者』という意味--の池に行って洗いなさい」と言われた者は、「もうその人を見ている」のです。

四旬節第 5 主日(ヨハネ 11:1-45)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。